様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２２０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2014
課題番号：２３６５２１１２

研究課題名（和文）日本人チューターと中国人・韓国人留学生のミスコミュニケーションとその回避

研究課題名（英文）Between Japanese tutors and Chinese,Korean foreign student - miscommunication and countermeasure

研究代表者
堀尾　佳以（HORIO, Kei）

宇都宮大学・工学（系）研究科（研究院）・講師

研究者番号：１０５１３８８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　500,000円

研究成果の概要（和文）：日本人と留学生の、より良い人間関係構築のため、ミスコミュニケーションの「回避ストラテジー」を明らかにし、初級からでも学べる日本語教材を作成した。
日本人チューターと留学生は異文化に驚くことはあってもお互いに受け入れ良い関係を保つ努力をしていることが明らかとなった。ミスコミュニケーションを防ぐために「再確認」や「推測」など、意思疎通を円滑に進め、誤解を生む要素を取り除くための「回避ストラテジー」についても解明した。
この結果を受け、日本人とより良い人間関係を築くための初級からでも学べる日本語教材を作成した。文法は合っていても使わない方が良い表現や、日本人の感覚について学べるような内容を取り上げた。

研究成果の概要（英文）：A study to understand miscommunication between tutor and foreign student was conducted. Teaching material on the countermeasures to reduce communication barrier was developed for beginner level.
Despite their cultural differences, both sides had shown effort to understand each other. This study proofed that ”re-confirmation” and "conjecture" can be the key for miscommunication countermeasure. Japanese language teaching material for beginner level that is focused in fostering a better relationship with Japanese people is developed. For example, it emphasis on grammatically correct Japanese but culturally awkward expression. A documentation of Japanese teaching material for a more natural communication method.

研究分野：日本語学

キーワード：ミスコミュニケーション回避　日本人チューターと留学生　初級から学ぶ　コミュニケーションを学ぶ教材

１．研究開始当初の背景

留学生の日本語学習および日常生活支援を行っているうちに、中国人・韓国人留学生と日本人チューター間でミスコミュニケーションが起き、そのまま関係が破綻してしまった例を身近で見てきた。また、留学生・日本人双方から、より良い人間関係の構築について相談を受けた。

そこで、どのような場合にミスコミュニケーションが起こり、関係破綻まで至ってしまうのか。また、上手に問題解決が出来たペアは、問題が起こった時にどのような回避ストラテジーを使用しているのかについて明らかにしたいと考えた。

特に中国と韓国の留学生が多かったことと、日本語教師として勤めた経験から、要因になると考えられる習慣なども踏まえて分析を進め、より良い関係を築くために必要な点を探ろうと考えた。

２．研究の目的

日本語教育・異文化間コミュニケーションの両分野にまたがり以下の 2 点を中心に研究・分析を進めた。

1 日本語による問題

日本語文法としては正しくても、人間関係を築く上で、日本語力不足や、自国語で可能な表現の直訳などによるミスコミュニケーションが存在するのではないか。

2 異文化相互理解

中国人・韓国人留学生と日本人チューターの、異文化相互理解がチューター活動に及ぼす影響についても調査を実施する。

留学生に日本語教育をする際、注意すべき表現を明示し、ミスコミュニケーションを事前に防ぐことを目的とし、日本人チューターへの教育にも活かせるよう、日本語の初級教材としての教科書やチューター事前教育に反映させる。

また、日本人チューターに異文化理解教育を実施すること、留学生の要望を伝えることで、より円滑で満足のいくチューター活動が行えるよう指導し、チューター教育に活かすことができる。

３．研究の方法

1 年目は、日本人チューターと中国人・韓国人留学生の、日本語を用いたコミュニケーションにおいて起こる問題点を中心に調査を行った。

宇都宮大学・北見工業大学・九州大学で日本人チューターと中国人・韓国人留学生の自然談話を収集し、ミスコミュニケーションが起こる場合やそれを回避しようとする行動について分析した。

また、チューター活動、チューターと留学生の人間関係についてもアンケートおよびインタビュー調査も実施した。

４．研究成果

研究結果から、ミスコミュニケーションの要因となる留学生の日本語表現についてまとめた。具体的には、文法的には正しくても使用しない方が良い日本語の表現や、日本人の習慣について言及した。例えば、「時間を守る」といった概念や、「謝罪をする」際の表現方法とその心である。

また、「おごる」ことについて、中国や韓国との考え方の違いについても示すことができた。

具体的な例としては、「お世話になった友達におごる」という点についてである。留学生同士が話をしていた際、おごって貰う側の中国の学生が「じゃあ、一番高いものを頼む」と言ったが、韓国の学生は「おごってくれる人と同じものを頼む」と言った。仲が良い学生の会話ではあったが、日本人チューターに同じように話してしまうと驚くことは想像に難くない。そこで、「友達が『おごる』と言った時に、どんなものを注文するか」について質問したところ、次のような結果が出た。

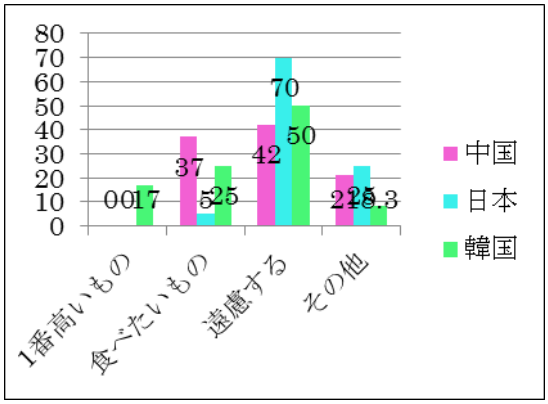

図1．「おごる」ことについて

このグラフでは、日本人学生および中国人留学生は「１番高いものを食べる」という回答がなかった。前述の留学生に話を聞くと、「半分冗談で言っただけで、仲が良いから言える」とのことだった。

一方で、韓国人留学生は 17%が「１番高いものを食べる」を選んだ。フォローアップ・インタビューで尋ねると、「自分がおごる時に、相手が１番高いものを頼むこともあるので、おごって貰う時には自分もそうする」という回答を得た。

日本人はというと、「遠慮する」が突出している。被験者の留学生も日本に留学しているからか、中国・韓国ともに「遠慮する」が予想よりも多いという結果が出た。

以上の調査をふまえ、実際に留学生と日本人チューターの会話を録音・分析した結果を論文にて発表した。以下、要点のみまとめる。

山田・堀尾（2009）では、談話分析を通して NS と NNS の情報提供型話題導入について、NS では情報提供型では話の流れを示したり、前の発話との関連を示したりするなどして聞き手への配慮をしながら話題を導入しているのに対して、NNS ではそのような配慮が見られず、それが話題転換の流れがスムーズに行かない要因となっていることが分かった。しかし、話題転換がスムーズに行かなくても、NS が再度 NNS の発話意図を確認したり、推測したりすることで話題が展開していっていた。このことから、NS、NNS 両者がお互いに協力して会話を作っているというコミュニケーション様相が窺われた。

コミュニケーションについては、破綻例・スムーズな展開例のどちらとも、コミュニケーションをとる人々の人間関係によって差が見られるということが分かった。

次に堀尾（2011）では留学生に調査を実施し、チューター制度への要望を明らかにした上で、チューター側の認識や制度の活動実態調査からも、現状と要望の開きについて示すことができた。今回の調査を通して、チューター制度に関する認識の違いが、活動内容や人間関係に影響を及ぼしている可能性がある事も分かった。

留学生とチューターが「チューター活動」に何を求めているのか、ということが、人間関係だけでなく制度に対する満足度にも影響を及ぼす可能性があるようだ。研究や勉強を中心とするか、人間関係を重視するのか。「チューターの理想的な在り方」によっては、チューターの活動への姿勢も変わってくるだろう。

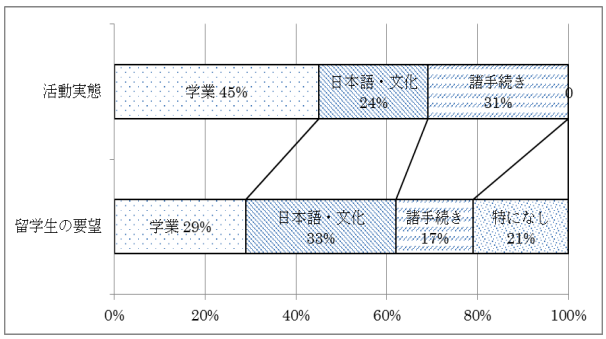

図2．チューター活動実態と要望の比較

また、チューターへのインタビューを行ったが、研究者とチューターが人間関係を築いた上で本音を引き出さなければならないため、一般化できるだけの資料収集が難しいことも分かった。

堀尾（2013）では、これまで、留学生と日本人チューターの関係をより良くするために、「チューター制度」を中心に研究を進めてきた。その過程で、両者の間で起こるミスコミュニケーションは、日本語の問題だけでなく、様々な理由による可能性が出て来た。特に、回避ストラテジーは、伝えたい事と受け取るべき事を一致させることができる「再確認」と日本人チューターが推測し、相手の言いたい事に近い語彙を列挙するなど、助け舟を出す「推測」であった。

再確認例：

留2：そのする、使う、使っても大丈夫ですか？
日2：描写？自分の気持ちとか？じゃない？
⇒言い換え
留2：あの、あの、出来事とか
日2：ああ、「起こった後」ということね。
⇒確認

ある語彙について「言い換え」を提示し、それについて「『○○』ということ」であると再確認している。この「再確認」により、伝えたい事と受け取るべき事を一致させることができるのである。

推測例：

留４：やっぱり、その…世界…ええ、
…世界…ま、ましつ？
→分からない
日４：え？ま？
留４：世界が終わり。［⇒言い換え］
日４：ははは（笑）
留４：そういう映画がありますね。
日４：世紀末みたいな..何か地球が終わる
[推測]

ここでは「世紀末」という語彙が分からなかった。その語彙が「分からない」と伝え、留学生は「世界が終わり」と言い換える。このヒントから、日本人チューターは「世紀末」と言いたかった、と理解したのである。

以上のように、「再確認」「推測」ともに、意思疎通を円滑に進め、誤解を生む要素を取り除くことでミスコミュニケーションを「回避」している。これはつまり、相手の気持ちや伝えたいことを「理解しよう」という心がミスコミュニケーションの「回避」に繋がっているとも言えよう。

これまでの研究結果をふまえ、留学生と日本人とのコミュニケーションには、相互に理解しようとする姿勢があれば、ミスコミュニケーションを回避することができるということが分かった。これは、相互理解をより深めるための「異文化理解教育」がいかに重要であるか、ということに繋がる。

本研究の調査から分かったことをふまえ、指導した方が良いと考えられる項目を挙げる。

・時間を守る。
・指で指さない。（ジェスチャー）
・呼び捨てにしない。
・年齢やプライベートに関して聞くタイミングを見計らう。
・金銭感覚の違いに注意する。

ここに挙げたもの以外にもあるだろう。それは今後、明らかにしていくことにする。なによりも重要なのは「自国のルールを押し通さず、日本の文化を学び、受け入れる」ことであろう。

以上のように研究結果をまとめた日本語の教科書では、本文で実例を提示することにより、どのような場面で齟齬が起こりうるかを伝え、ミスコミュニケーションを回避するための方法についても学べるよう工夫した。そうすることで日本語力不足・日本文化理解不足によるミスコミュニケーションは避けられるようになったと言えよう。

異文化相互理解を促進するために日本語教育で使用できるように、日本事情・日本人の習慣にも言及し、ミスコミュニケーションを

事前に防ぐためのテキストを作成し、実際に授業で使用した。同様に、チューター制度の機能向上のために、事前教育でも活用した。調査で収集した資料を使用し、分析・検討した結果を各学会で発表することで成果を共有し、意見交換を行った。

今後の課題としては、本研究で得た成果を反映させ作成した教材を、更にブラッシュアップさせ、初級から学べるだけでなく日本人と上手にコミュニケーションがとれるよう、指導できる教材へと進化させる。また日本人学生へのチューター教育にも活かせるようにする。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

山田・堀尾(2009)
日本人チューターと中国人･韓国人日本語学習者のコミュニケーション
―話題転換における話題開始部を中心に―

堀尾(2011)
留学生と日本人チューター間のコミュニケーション―チューター制度実態調査から見えてくるもの―

堀尾 (2013)
留学生と日本人のコミュニケーションにおける差異―異文化相互理解教育のための基礎研究―

〔学会発表〕（計　３件）

口頭発表

堀尾 (2011)　東アジア日本語教育日本文化研究学会
留学生と日本人チューター間のミスコミュニケーションとその回避について

ポスター発表

堀尾･山田(2012)　日本語教育学会国際大会：名古屋
留学生と日本人チューターのミスコミュニケーション回避について

堀尾(2014)　日本語教育学会国際大会：オーストラリア
留学生･日本人チューターの円滑なコミュニケーションのために―留学生向け初級テキスト：指導実践を中心に―

〔図書〕（計　　件）　特になし

〔産業財産権〕　特になし

○出願状況（計　　件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　特になし

６．研究組織
(1)研究代表者
堀尾　佳以
（　　）
研究者番号：10513880

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：